

## 97. 蕉風復興運動における連句資料の調査と付合文芸の分析

金城学院大学人間科学部 教授 寺島 徹

### 概要

本研究では、江戸中期・後期の蕉風復興運動に尽力した暁台、蕪村とその周辺俳人の資料収集・調査をもとに、資料翻刻、資料集の作成・本文校訂を行い、連句分野の芭蕉受容史の解明と連句メカニズムの効用、教育への応用について分析しようとするものである。

現在の蕉風復興運動の連句研究は、一部の俳人に集中しており、俳人間の連携・相互作用に焦点をあてた研究となっていない。地方蕉門系の俳人たちの連句資料、関係資料（論書・伝書、評点、書状、稿本）の整理をもとに、相互連携的な作品創造の有り様を明確にし、蕉風復興運動の特性の一面を捉える。基礎的調査研究で得られる俳人の連携・対話の知見を門弟指導法の視座でも問い直し、文学教育で求められる「対話的」な要素についても方法論を構想する。

### 背景および目的

広範囲にわたる調査により、天明期・化政期資料を調査・整理し、連句資料集の作成を通して連句のメカニズムの特質を探るための基礎作業を進める。これにより単線的に見てこられてきた連句テキストを複線的に捉えることができ、芭蕉顕彰活動と受容史を東海地方を中心に、連句の面から分析することが可能となる。

呉春、百池、暁台、樗良らに焦点をあて、彼らが織りなす「座」の変容をもとに、蕉風復興運動を俯瞰的に捉えることが期待できる。これまで、天明俳諧[蕪村時代]、化政期俳諧[一茶時代]という既存の枠組みについてとらえ直し、モデルケースを提供することが可能となる。暁台らの連句資料を集成・分析することは、その手法を意識していた蕪村の連句研究にも資する。また、連句の対話的性質の究明は、主体性、対話性を重視する教育視座にも適うもので、応用的教材の提供も目指す。

### 方法

2024年に、宮城県仙台市の旧家および聖和短大において原本の書誌調査、資料収集を行った。専門的な書誌調査の成果を明らかにするため、MS アクセスのVBA設計などを依頼し、pythonでも抽出ができるよう、データの構築をはかった。暁台、百池などの連句資料を収集し、分析、翻刻などを行った。蕉風復興運動における風羅念仏の東北における意味について考察し、巻1、巻3のテキストを公表した。

また、蕪村の愛弟子、寺村百池の新資料について、尾張との関係性を中心に考察を深めた。寺村百池（寛延2〈1749〉～天保6〈1835〉）は、蕪村の高弟としてしられる煙管商を営んだ俳人である。百池資料の概要は、(1)は、樗良の『石をあるじ』を書写したもの。(6)は自筆の発句の句帳である。(8)は『暮雨巷月並句合』という、暁台最晩年に行われた、いわゆる月並句合の丁摺である。これまで、藤園堂書店所蔵のものが紹介されてきたが同じ摺りのものである。(11)は、百池、月居らの発句の句稿である(1)(3)(4)(5)(7)(9)(10)(13)(14)は、連句の稿本、零葉の類である。(15)は、前半が『野ざらし紀行』の抄出、後半が、暁台と百池、尾張の暮雨巷連中の脇起し百韻である。この中から、連句資料に、とくに注目し、整理、分析することとした。

## 結果および考察

申請時から、継続的に資料翻刻をおこなっていた、貞門、談林時代の秋田俳人、桂葉による連句資料『秋田千句』の資料紹介を行った。

中興期では、『風羅念仏 みちのく』の発表と、百池の「寺村百池雑集」（天理大学附属天理図書館所蔵）の資料報告を行った。

『風羅念仏 みちのく』巻1・3について、あらためて、位置づけについて敷衍し、その上で、全体を翻刻し、暁台の一座する歌仙の連句資料を大幅に捕捉することができた。

「百池雑集」について、連句資料に注目し、整理分析を行った。とくに、『微雨楼聯句集』（わ229-39-5）は、百池が尾張をはじめて訪れたときに一座した歌仙資料と思しく、時期も、安永7年（1778）頃と推定することができた。蕪村と暁台の交流において、百池が間に入ったことは広く知られているが、その交流に軋轢が生じた（安永6年11月16日付、百池宛蕪村書簡など）頃の百池の動向が新たに明らかになった。また、最平ら尾張大高俳壇と百池との新たな関係性も見出すことができ、百池が尾張をはじめて訪れた交流の様子も明らかになる。安永7年付11月11日付の暁台・士朗宛の蕪村書簡における、尾張と夜半亭との交流を考える上でも、示唆的な資料といえる。安永中期の暮雨巷と夜半亭の交流は、安永末から天明初期にかけての蕉風復興運動の起点となるものであるため、この時期の交流について、側面から明らかにする資料は貴重と考えられる。

また、(15)の書留の後半は、暮雨巷一門の百韻となる。杜国の「心より咲こそ花のよしの山」（庭竈集）を立句として、暁台、岳輅、臥央、閩毛らの脇起し百韻となる。百池は一座していないので学習のために書き留めたものと推測される。暁台は、『風羅念仏』をはじめ、さまざまな形で、芭蕉を中心とした脇起しの連句（おもに歌仙）を試みているが、同郷の先達になる杜国の発句により脇起しをしていることは、尾張蕉門の末流を自負する暁台ら暮雨巷の目指す正風意識として注目される。

本研究における、これらの連句資料の収集の成果をもとに、継続的に、XMLファイルの整理を行い、今後も、pythonなどを利用し、作法を意識した検索・分析ができるようにデータ・ソフトを整備してゆく予定である。学校現場でも国語や総合的な学習の時間などで行われつつある連句系素材作成の一助にもなるよう整備したい。  
(完)

## 発表論文

- 1) 寺島徹(2024) [翻刻]桂葉撰『秋田千句』（下）近世文学研究（新編）(8),111-128
- 2) 寺島徹(2024) 翻刻『風羅念仏』「みちのく」巻一・三 金城大学大学院論集（人文科学編）21(1),307-286
- 3) 寺島徹(2025) 『寺村百池雑集』の連句抄 近世文学研究（新編）(9),56-70